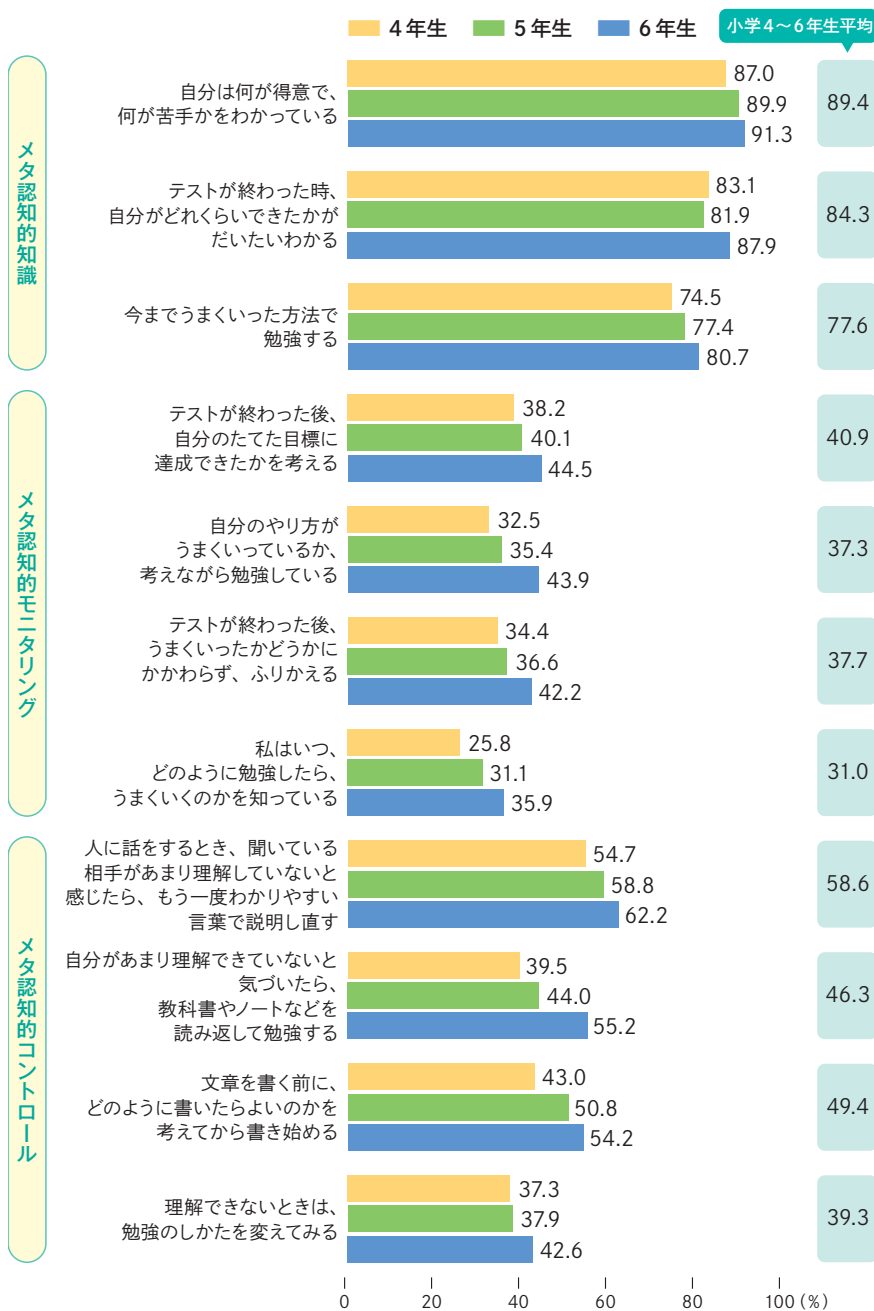


小学校高学年の「メタ認知」の実態とは

今回は、資質・能力を効果的に育成するために重要な要素となる「メタ認知」を取り上げます。小学校高学年を対象とした調査の最新データを用いて、「メタ認知」と学習動機づけ、学習方略との関連について解説します。

1 学年が上がるにつれ、「メタ認知」が伸びている

図1 小学校高学年の「メタ認知」の自己評価



小学4～6年生の約9割が、自分の特性を認知

「メタ認知」は、学習動機づけ、学習方略とともに、学習に関する自己調整を行う上で重要な要素である。

小学4～6年生の「メタ認知」に関する自己評価(図1)を見ると、約9割が、自分の認知特性に関する知識を持っている(「自分は何が得意で、何が苦手かをわかっている」)。そして、約8割は、「今までうまくいった方法で勉強する」といった自己認識を持っている。

また、常に自分の学習を意識しながら進めたり、テストの後、自分の立てた目標の達成度を考えたり、振り返りを行ったりするといったモニタリングを行いながら勉強をしている子どもは3～4割いる。

さらに、約4～6割は、相手の理解状況に合わせて自分の説明の仕方を変えたり、自分の学習状況を把握した上で、理解を促進する方略を選択して勉強したりするというように、自分の活動をコントロールしようとしていることが明らかになった。

目標や計画の修正ができるのは半数以下

小学校高学年になると、多くの子どもは自分の認知特性を把握するようになってきているが、自分の活動の見通しを立てたり、進み具合を評価したりすることや、自分が立てた目標や計画を修正することができていると自己評価している子どもは、半数にも達していない。

ただし、そうした「メタ認知的モニタリング」力や「メタ認知的コントロール」力は、小学4～6年生にかけて、少しずつ伸びていることもデータから分かる。

注1) 「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

注2) 『成人用メタ認知尺度の作成の試み - Metacognitive Awareness Inventory を用いて -』(阿部真美子・井田政則、2010)を参考に、項目を作成。

小学4～6年生とその保護者を対象に、子どもの学びや、保護者のかかわりに関する意識と実態について調査を行った。小学4年生 992組、5年生 1,005組、6年生 1,007組の親子に協力を得た。

◎本調査結果の詳細は、下記ウェブサイトをご覧ください。

<https://berd.benesse.jp/research/>

ベネッセ教育総合研究所
主任研究員

邵勤風

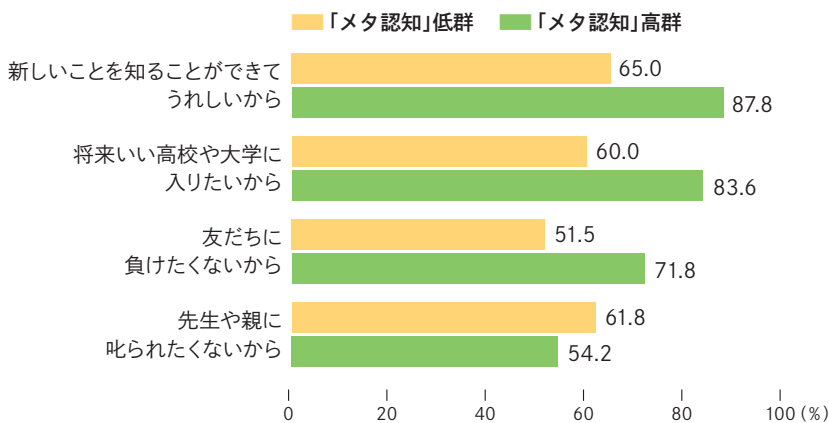
しょう・きんふう



子ども・保護者・教員の意識や実態に関する調査研究を担当。近年、子どもの主体的な学びを支える学び方や周囲の支援に関心を持ち、学び方に関する理論研究や実証研究に取り組む。

2 「メタ認知」と学習動機づけ、学習方略の活用と関連

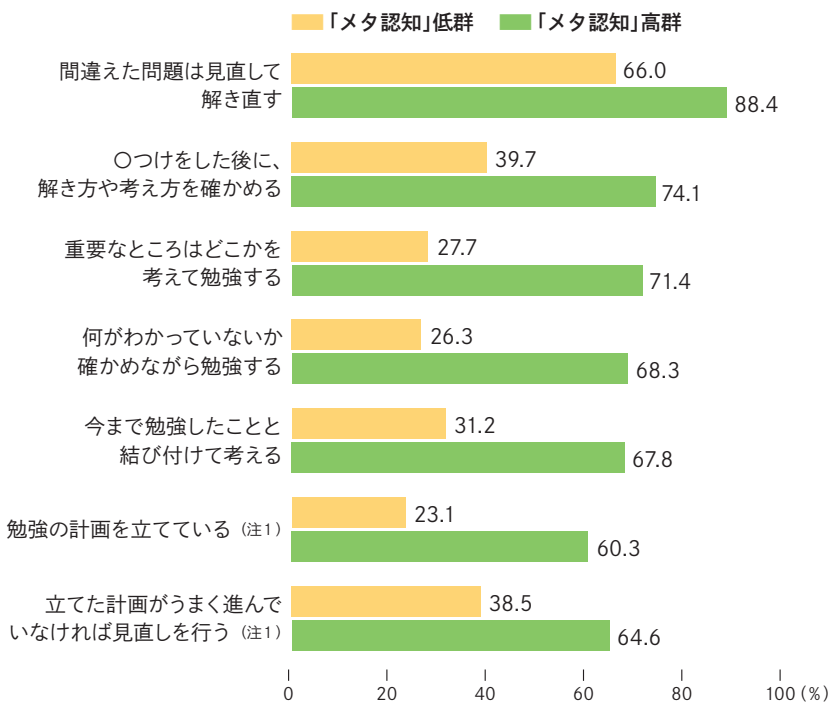
図2 「メタ認知」と学習動機づけとの関連



注1) 「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

注2) 図1の「メタ認知」に関する項目について、「とてもあてはまる」を4点、「まったくあてはまらない」を1点とし、11項目の総得点を算出し、「メタ認知」低群と高群に2分割した。

図3 「メタ認知」と学習方略との関連



注1) 「勉強の計画を立てている」については、「あなたはふだん、勉強するとき、計画を立てていますか」の質問に対して、「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%を示している。また、「立てた計画がうまく進んでいなければ見直しを行う」については、「勉強の計画を立てている」と回答した人のみを分析し、「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%を示している。

注2) 注1以外の項目については、「よくある」+「ときどきある」の%。

学習への動機づけを左右する「メタ認知」

「メタ認知」と学習動機づけとの関連を見ると、「メタ認知」の低い子どもは、他者から叱られたくないという消極的な外的動機づけで学習している。一方、「メタ認知」の高い子どもは、内発的動機づけで勉強し、進学という目標を立てて積極的に学習に取り組む傾向にある(図2)。

また、図3を見ると、「メタ認知」が高い子どもほど、様々な学習方略を活用しており、「メタ認知」が低い子どもとの間には約20～40ポイントの差がある。「メタ認知」がうまく働いている子どもは、勉強の計画を立てたり、修正したり、間違えた問題を見直したりするメタ認知的方略の活用率が高い。加えて、学習のプロセスである解き方や考え方を確かめたり、今までの学習と関連づけて考えたりするメタ認知的方略の活用率も高い。

「適切な褒め方」が「メタ認知」につながる

図では示していないが、「メタ認知」の育成には、保護者の「適切な褒め方」が子どもの「メタ認知」に影響することが本調査結果から明らかになった。子どもの具体的な態度や行動を、大人が「誠実に」「具体的に」褒めることで、子どもは自分の態度や行動を客観視できる。さらに、正解できたかではなく、解き方や考え方といった学びの「プロセス」を褒めることで、「メタ認知」を育て、学習動機づけを高められ、そして学習方略の工夫につながる。学習方略の使用を通して、子どもの「メタ認知」を高めることにもつながる。

学校では、教員の「褒め・励まし」が子どもの自己肯定感や、学習動機づけを高め、仲間とともに学び合うことによって子どもが自分自身の学びをより客観的に捉える「メタ認知」を育てるだろう。